多様な「改革」とその足元

山中 弘
哲学・思想学系教授

前号の特集に寄稿された文章を読んでみますと，二つのタイプの主張が見受けられます。一つはご自身が係わってこられた組織の改革を具体的に提示されているタイプのものです。この期に及んで一般的に改革を語るといった悠長なことではなく，まさに佐藤先生のいう改革の「賽は投げられた」というわけです。もう一つのタイプは，個別的な組織よりももう少し具体的に，授業評価，英語運用能力，組織だった教育プログラムの確立など，大学院教育に係わる提言や，大学院生の資質（鎌形先生がそのなかに楽観主義を挙げられているのは大いに賛成です）などを提言したものです。私にとってもどれももっともな提案だと思います。

当然すぎることですが，一口に大学院改革といってもそれぞれの学問分野によってイメージするものがかなり異なっています。その意味で，「分野による教育方針の違い」を指摘された田仲先生のご意見には大いに共感できます。学問分野による差異を無視して，ある分野で自明になっている尺度からの改革の押しつけは，非常に危ない感じがします。国際的競争力と外部評価というよく言われる尺度さえも，研究分野の特性を十分に吟味して慎重に適用すべきでしょう。こう書くと，たちまち「抵抗勢力」などといったレッテルを貼られかねませんが，自明なものを根底から疑ってみるという態度は，こうした時代だからこそ特に必要だと思います。

いずれにしても，旧帝大を中心として優秀な学生を奪い合うという状況の中で，一部組織には優秀な学生の確保に汲々とする状況も生じてきているようにも思われます。私の知っている人文系の領域では，研究への動機づけが弱く，モラトリアムの時期を過ごすために大学院に在籍するという院生もおり，さらには指導する側の教官自体が本学の複雑多岐にわたる組織運営のために膨大な数の会議に追われて疲労気味であるようにも思われます。こうしたことを考慮にいれると，改革の足元の問題にもどう目を配るのか，このあたりも重要な気がいたしました。

（やまなかひろし　宗教学専攻）